

本音を表明しない頻度調査—異文化理解のために

前 川 智 子*

Hiding One's "True Colors": A Cross-cultural Survey

Tomoko MAEKAWA

1. はじめに

日本人は表現が曖昧で、しかも本音と建前が違うことがあるので実際には何を考えているのか分からないという在日外国人からの批判を多く耳にするし、このことが異文化コミュニケーションに影響を与えていることも指摘されている。^{1,2} 又、日本人を理解するには日本人の本音と建前を理解しなければならないとも言われている。³⁻⁵ 確かに「本音」「建前」という語が頻繁に使用されていることから、日本人が本音と建前を日常生活の中で使い分けていることは確かである。では、それは日本人だけの特徴であって他の文化圏の人々は常に本音で話しているのだろうか。或いは彼らも本音と建前を使い分けているのだろうか。もしそうだとすれば、どこが日本人と違うのだろうか。或いは日本人と全く同じ傾向にあるのだろうか。

このような疑問点を解明するために、1998年から1999年にかけて国内外でアンケート形式による第一回目の調査を行った。将来的には異文化に於ける本音・建前コミュニケーションの比較研究を目指すものであるが、今回はその第一歩として「本音を表明しない頻度」が文化的背景の違いによって違うものであるのかどうかの調査を実施したのである。

本稿ではその調査結果を国別、性別、地域別など細かく分類した上でグラフで表して行く。それは、異文化を形成する要素には国籍の違いのみならず姓、年齢、地域、職業などの違いも含まれるからである。又、比較データの条件を出来るだけ統一することで調査結果に、より妥当性を持たせようとするためでもある。

2. 調 査

2.1 調査内容

自分の気持ちを率直に表すかどうかは相手との関係や状況などによって異なるのではないかと思われるので、調査は三つの場面即ち、相手が親しい友人などの場合、相手が上司などの場合、そしてグループ討議の場合という三場面を想定して行った。それぞれの場面に於いて本当の気持ちを表さないことがあるかどうかという質問で、それに対する回答の選択肢は、(本当の考えや気持ちを表さないことが) よくある (often), 時々ある (sometimes), ほとんどない (seldom), 全くない (never) の四つである (付録1, 2参照)。付録1, 2で示しているように日本語文、英語文共に、質問調査紙では「本音」という言葉は用いていない。

*言語教育センター講師
2000年1月11日受付

2.2 調査方法

日本人

個人が行う調査は、ややもすれば調査範囲が狭まりデータの妥当性が弱くなる恐れがある。そこで今回の調査に於いては、回答者の層が偏らないようネズミ講式に、つまり20名ほどを核に、そこから更に依頼してもらおうという形を取った。調査の過程で同じ日本人でも地域によって、例えば東京など大都市と地方都市長崎、或いは農村部に住む人々では違いがあるのではないかと考え、とりあえず東京都内及びその周辺都市部に居住する人々に対する調査を加えた。その際にも新たな知人10名程に調査の取りまとめを依頼して回答者の層を広げるよう心がけた。

一方、学生は長崎総合科学大学と長崎大学に在学する18歳から20歳代の全国各地からの出身者である。

外国人

日本語版質問を基に英語版を作成し、長崎県在住のALTへの調査を行った。52人のALTから

丁寧な回答を得たものの、その出身国は5カ国に及び、それを「外国人」とひとまとめにすることは出来ないで更に調査を広げた。まず、1998年9月の米国（ミネソタ、アイオワ、イリノイ州）出張の折、訪問各地で同様の調査を行い社会人、大学生を含め100件以上の回答を得た。次に、海外の友人に英語版質問用紙を送付し調査を依頼したところ、英国、スウェーデン、マレーシアから各20～30件の回答を得た。一方、かなりの数の米国人学生サンプルが集まったものの日本人学生と比較するにはまだ少ないことから米国のある大学に調査を依頼し新たに40件ほどの回答を得た。米国の学生は主としてLuther College (Iowa), Burksha Community College (Massachusetts) に在籍する18歳から20代の若者である。

このようにして集めた回答者の内訳は次節の表1～3に示す通りである。尚、調査対象はいずれの場合も大学生と成人の社会人であり、比較する際には両者を区別して処理する。即ち、「学生」は大学生を「成人」は学生を除く成人の社会人を示す。

2.3 回答者内訳

表1：日本人成人回答者内訳

居住地	総数	性別	合計	20代	30代	40代	50代	60～
長 崎 県 (Na)	186	男	93	22	24	12	25	10
		女	93	24	11	20	23	15
東京及び近郊 (To)	118	男	58	8	14	20	15	1
		女	60	16	20	7	12	5
日本人全体 (Ja)	304	男	151	30	38	32	40	11
		女	153	40	31	27	35	20
* 広 島 県 (Hi)	96	女	96	21	23	32	18	2

(注) 広島県内の調査は女性対象の講演会で実施したため回答者が全て女性に偏っているため日本人全体の統計からは除いているが、次章「3.5」の比較に於いて使用する。

表2：外国人成人内訳

居住地	総数	性別	合計	20代	30代	40代	50代	60～
米 国 (US)	77	男	38	9	13	7	8	1
		女	39	13	10	9	7	0
英 国 (UK)	36	男	14	11	3	0	0	0
		女	22	19	1	1	1	0
スウェーデン (Sw)	33	男	18	4	2	6	3	3
		女	15	7	1	3	2	2
カ ナ ダ (Ca)	8	男	2	1	1	0	0	0
		女	6	3	3	0	0	0
ニュージーランド (NZ)	5	男	2	1	1	0	0	0
		女	3	3	0	0	0	0
オーストラリア (Au)	4	男	3	2	1	0	0	0
		女	1	0	1	0	0	0
欧米人合計 (W)	163	男	77	28	21	13	11	4
		女	86	45	16	13	10	2
マレーシア (Ma)	35	男	23	15	8	0	0	0
		女	12	8	4	0	0	0

表3：学生回答者内訳

出身国(国籍)	総数	男	女
日本	154	92	62
米国	119	71	48

*そのほか、山口県から9、フランス、ドイツ、セネガル、赤道ギニア、フィリピン、インドから各1ずつの回答を得たが、サンプル数が極端に少ないので今回の統計には加えていない。

3. データの比較

「あなたは次のような場合—(1)相手が親しい友人などの場合、(2)相手が上司などの場合、(3)グループ討議の場合—に、本当の考えや気持ちと異なることを表すことがありますか」(付録1, 付録2)という質問に対して、上のような886名に上る国内外の人々から回答を得た。

以下に示す図1～図6は回答データを国別、性別、日本国内の地域別に分けて比較するものである。回答の選択肢は、(本当の考えや気持ちを表さ

ないことが)よくある (often), 時々ある (sometimes), ほとんどない (seldom), 全くない (never) の四つであり、各図に於いては便宜上英語による選択肢を用いている。

比較に際しては、「全くない」「ほとんどない」の一まとめと「時々ある」「よくある」の一まとめを比較するのもよいが、「ほとんどない」と「時々ある」の個人的主観が気になる場合には「全くない」に対する「よくある」比率を比べる方が説得力があるように思う。ただし一見する限り、双方の比較に於いて大きな差はないようである。

3.1 日米学生の比較 (全体)

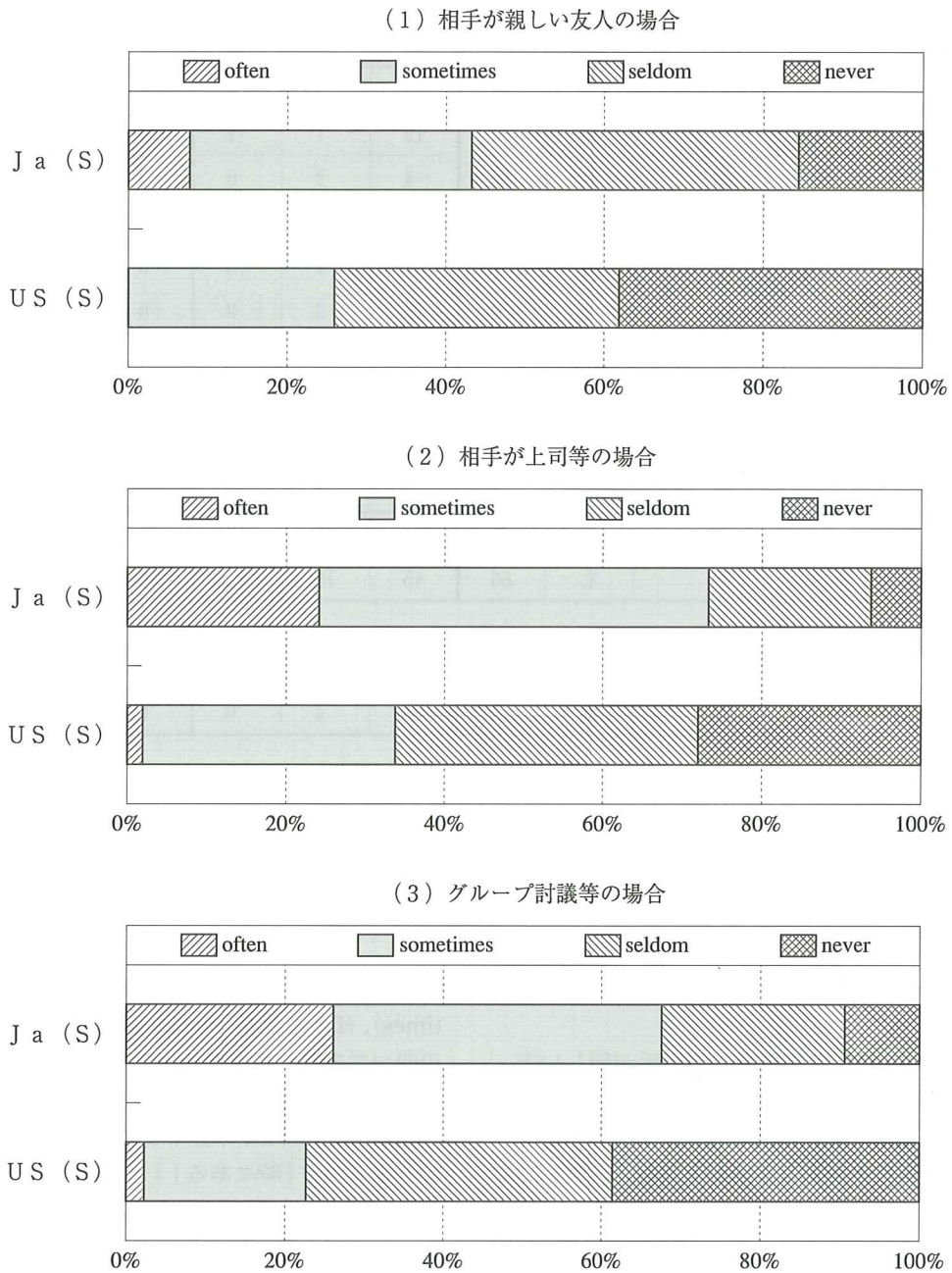


図1：本音を表明しない頻度（日米学生全体の比較）
Ja(S)=日本人学生，US(S)=アメリカ人学生

3.2 日米学生の比較（性別）

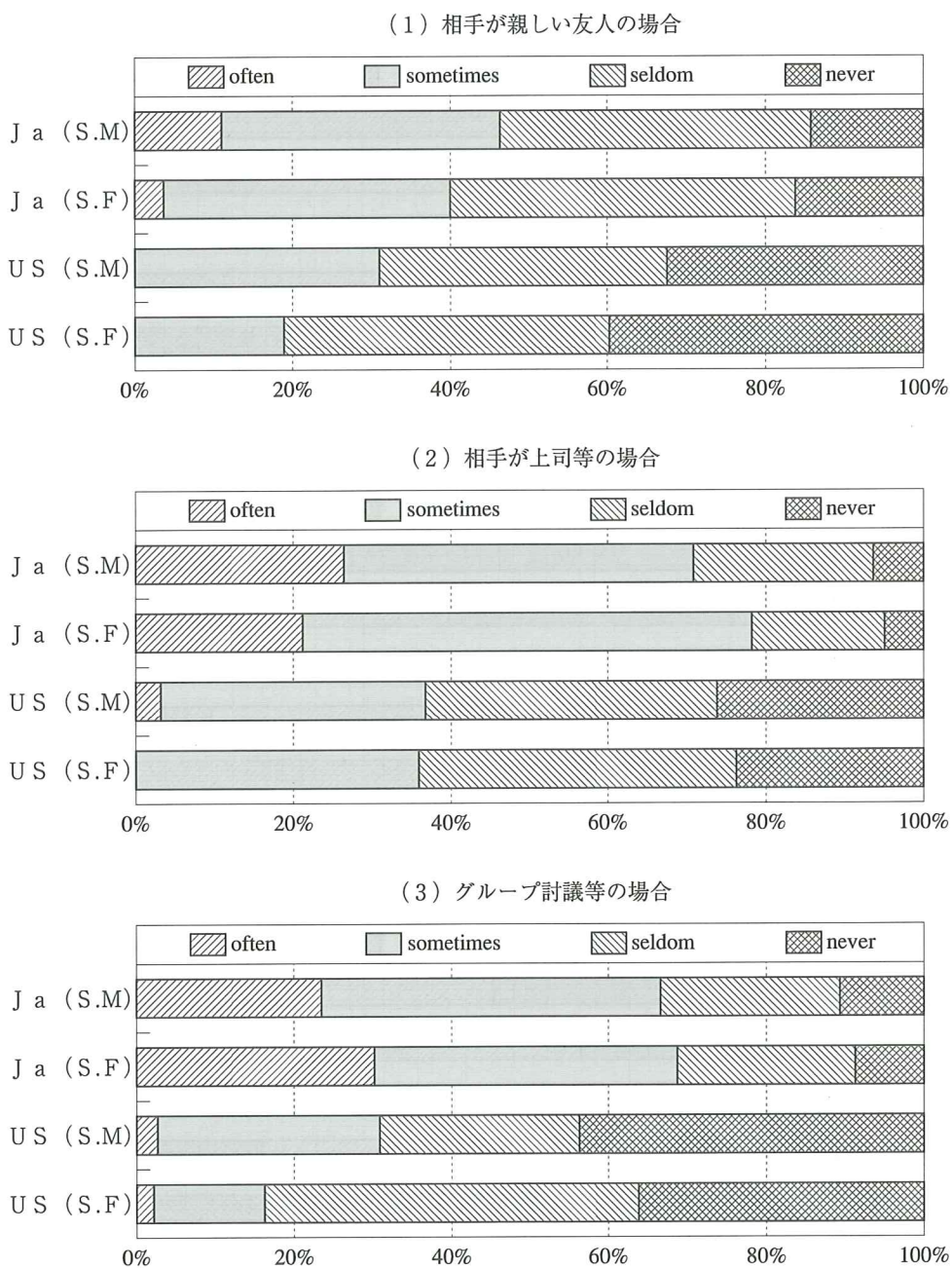


図2：本音を表明しない頻度（日米学生男女別比較）

Ja(S.M) = 日本人学生男, Ja(S.F) = 日本人学生女
 US(S.M) = アメリカ人学生男, US(S.F) = アメリカ人学生女

3.3 日本人と外国人の比較（成人全体）

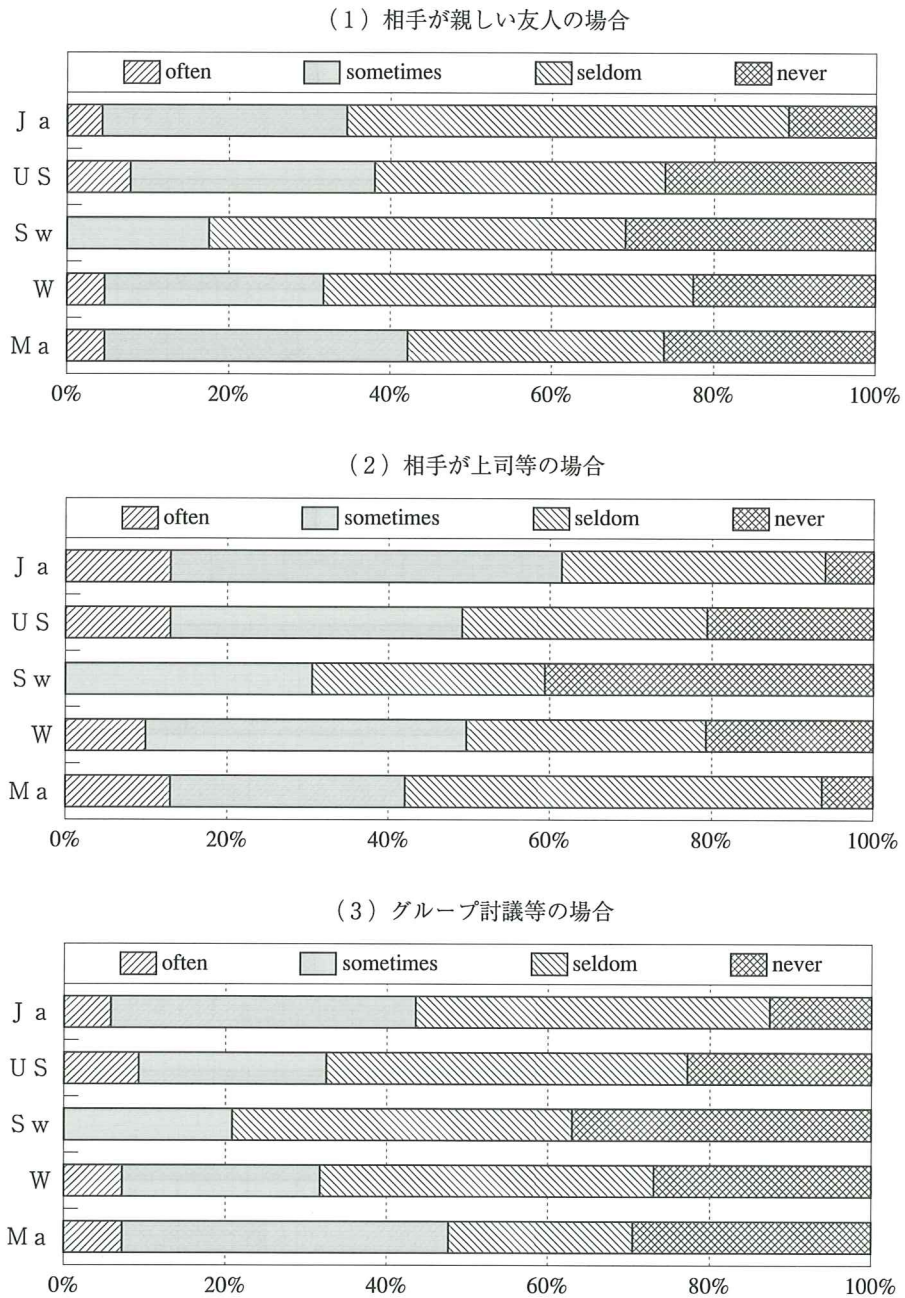
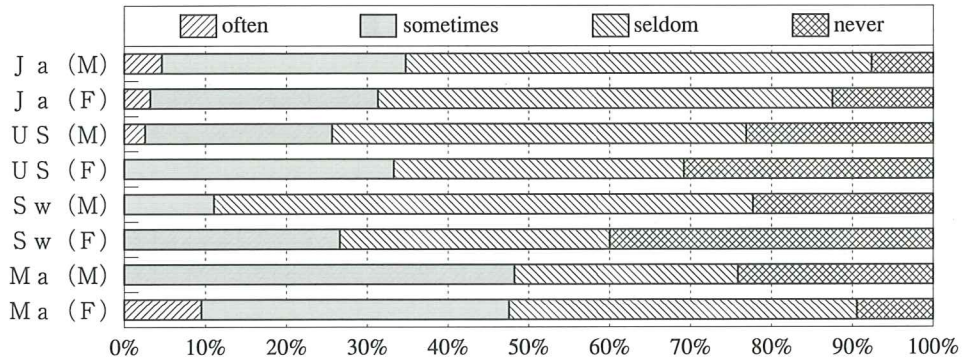


図3：本音を表明しない頻度（成人日本人と成人外国人の全体比較）

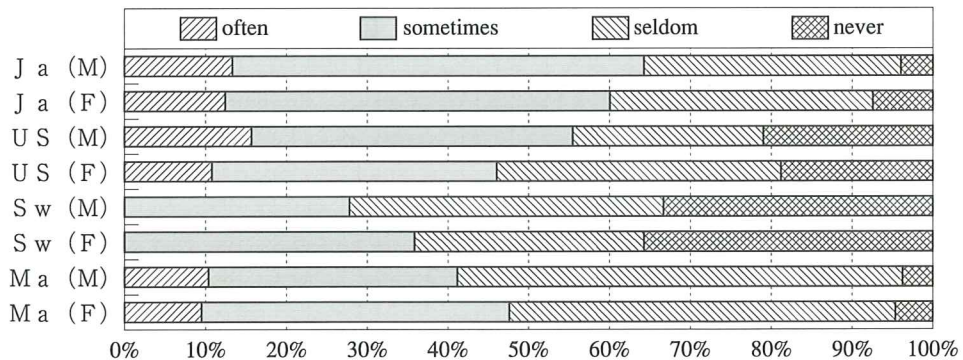
Ja=日本人全体, US=アメリカ人全体, Sw=スウェーデン人全体, W=欧米人全体, Ma=マレーシア人全体

3.4 日本人と外国人の比較 (成人・性別)

(1) 相手が親しい友人の場合



(2) 相手が上司等の場合



(3) グループ討議等の場合

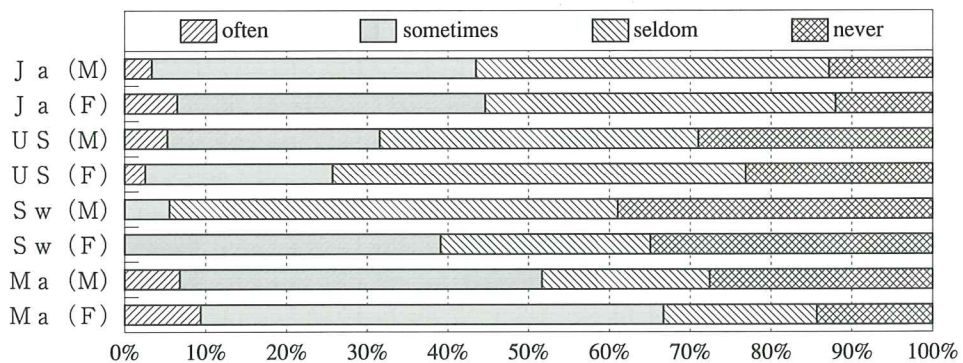


図4：本音を表明しない頻度 (成人日本人と成人外国人の男女別比較)

Ja(M)=日本男性, Ja(F)=日本女性, US(M)=アメリカ男性, US(F)=アメリカ女性

Sw(M)=スウェーデン男性, Sw(F)=スウェーデン女性, Ma(M)=マレーシア男性, Ma(F)=マレーシア女性

3.5 日本国内の地域別比較（男）

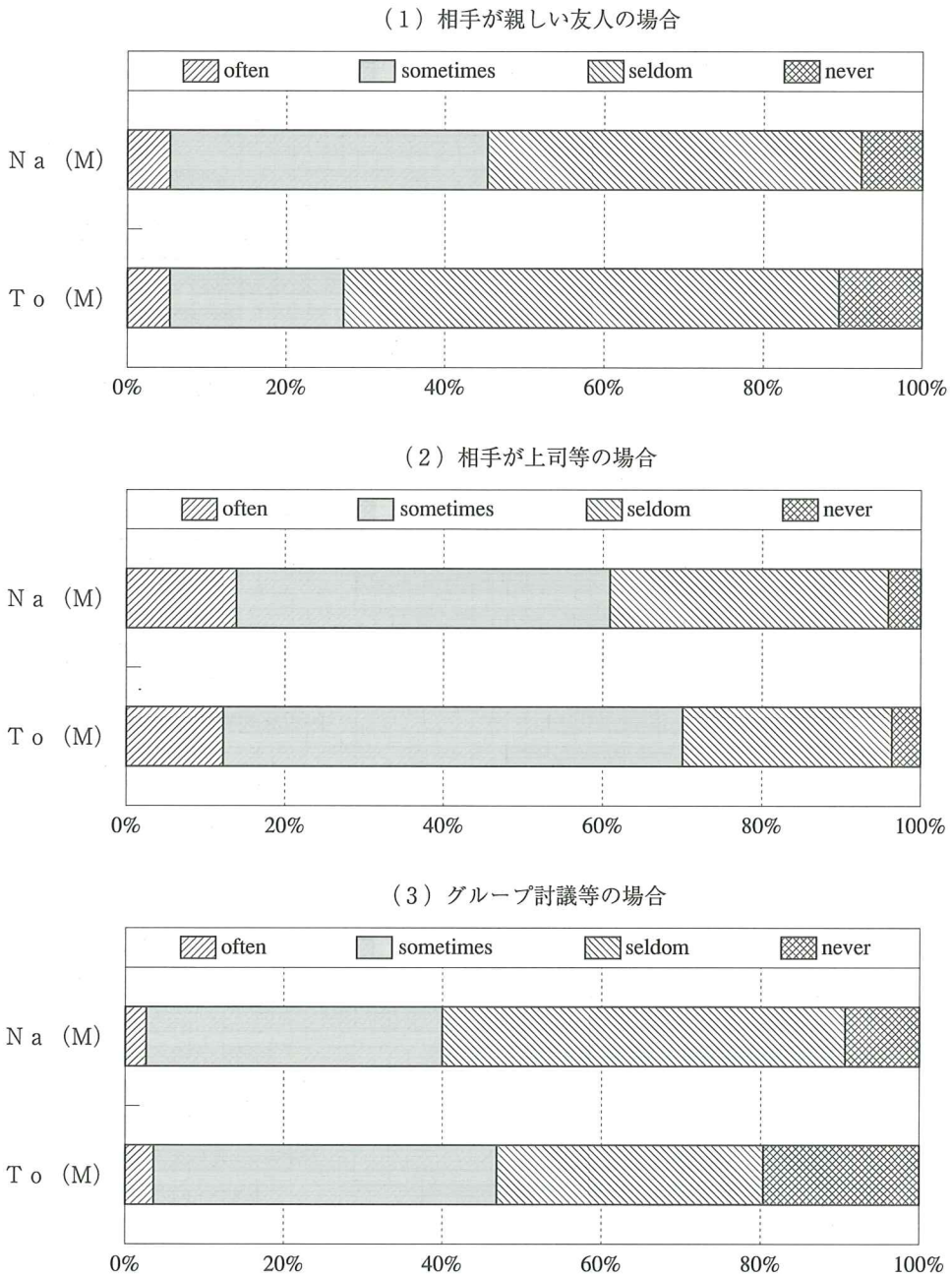


図5：本音を表明しない頻度（日本人男性の地域別比較）
Na(M) = 長崎男性, To(M) = 東京男性

3.6 日本国内の地域別比較（女）

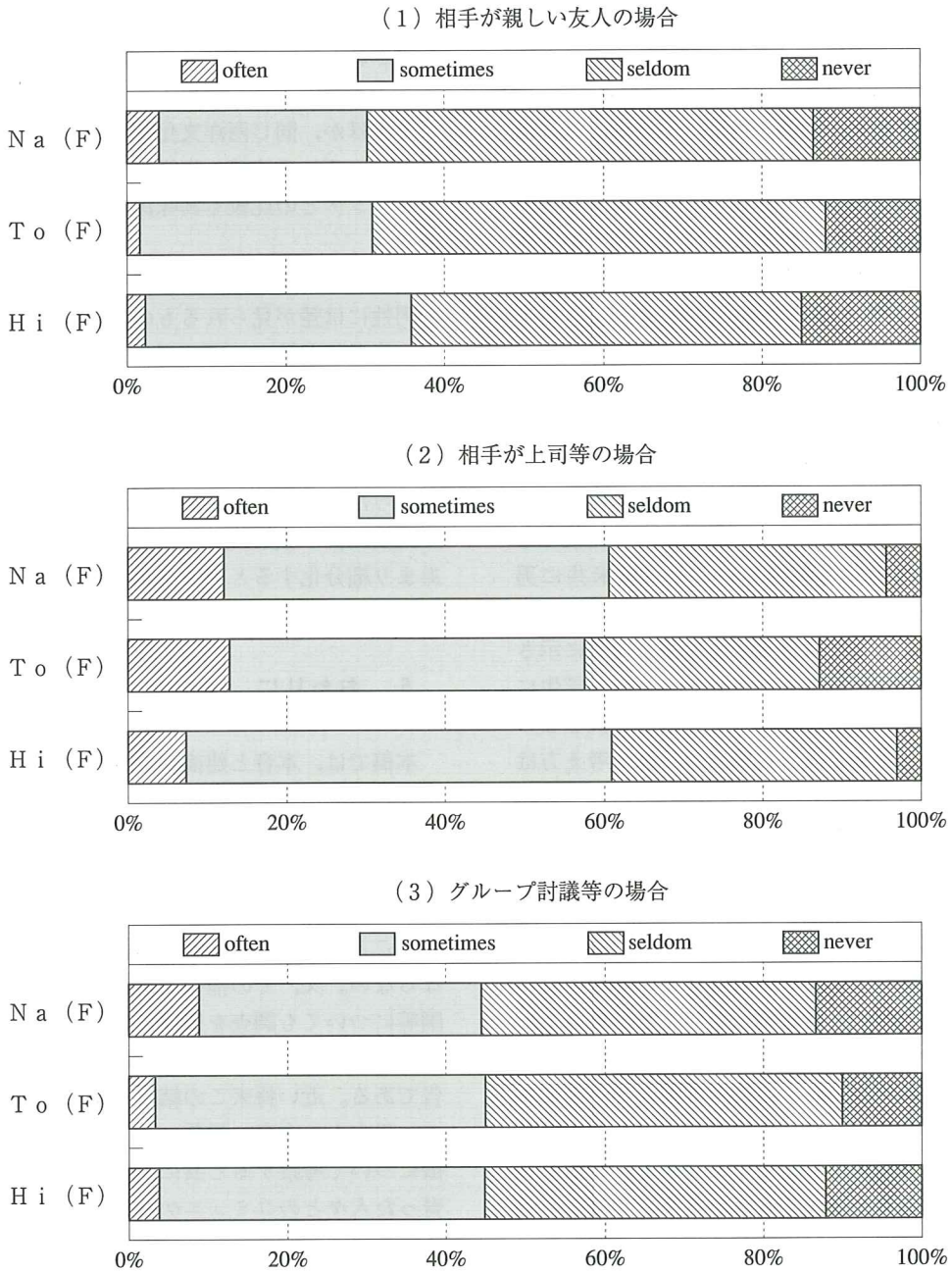


図6：本音を表明しない頻度（日本人女性の地域別比較）

Na(F)=長崎女性, To(F)=東京女性, Hi(F)=広島女性

4. 考 察

以上のように、相手が親しい友人などの場合、相手が上司などの場合、グループ討議の場合という三場面に於いて人はどの程度「本音を表さない」ものであるのかを、国別、性別、地域別、或いはそれらを混合した範疇に於いての比較を図式化してきた。日米学生全体の比較(図1)、日米学生男女別比較(図2)、成人日本人と成人外国人の全体比較(図3)、成人日本人と成人外国人の男女別比較(図4)、日本人男の地域別比較(図5)、日本人女の地域別比較(図6)という6種類である。

各々の比較に於いてその差が顕著であるか否かについては別の機会に考察するが、一見して差が明らかなものや差が無いものなど興味深い結果が現れている。例えば、図1の日米学生の比較では、回答者数が充分であること、同年代の比較であること、男女の比率が等しいこと(日米共に男60%、女40%)等の点でデータが比較可能であると言えるが、そこでは日米学生の差が顕著に示されている。つまり日本人学生はアメリカ人学生に比べるといずれの場合に於いても本音を表さないことが多いと言えよう。日本人の行動や考え方はアメリカ人のそれと対照的であると言われているが、⁶ 日米学生の比較はこのことを裏付けているようである。

日本人成人(男157人、女153人)と米国人成人(男38人、女39人)の比較(図3、4)では相手が上司などの場合とグループ討議などの場合に於いて日本人の方が本音を表明しないことが多いと出ている。この比較では日本人回答者数に比べ米国人回答者数が少ないものの他の外国人データよりはるかに多いこと、男女の比率がほぼ1:1である(日本人の男女比も約1:1である)ことから比較可能であると言ってもよからう。勿論このデータだけで民族のつぼと称されるアメリカを一般化することはできないが、そのように異文化が混在した社会としてのアメリカの特徴の一端として捕えることは出来るのではないだろうか。この

ことは、細かく分類した範疇も含め全ての文化圏に於いても言えることで、個々の差がある中で全体の全体として見た特徴として捕えていきたい。従って、いかなる統計に於いても同じであるが、ここで表された特徴が個々人の特徴ではないことは言うまでもない。

そのほか、同じ西洋文化圏に属するアメリカとスウェーデンの比較、東洋文化圏に属する日本とマレーシアとの比較も興味深いものになりそうである。

一方国内の地域別比較に於いては、長崎と東京の男性には差が見られるものの(図5)、長崎、東京、広島的女性では図6が示す通りほとんど差が見られない。しかしこれはあくまでも長崎市及びその周辺部居住者と東京及びその周辺都市部居住者との比較である。農村部や漁村部での調査では異なったデータが出るかもしれない。そのほか、年代別比較や職業による比較なども考えられるが、あまり細分化するとデータが小さくなり妥当性に欠けるのでここでは省略している。

5. おわりに

本稿では、本音と建前が違うことが果たして日本人特有の性質であるのかどうかを論じるための予備的調査として行った調査結果を提示してきた。本来、日本人と外国人を比較することが目的であるが、米国以外の国々のデータは量的に不十分であることから今後とも調査を続けていかなければならない。又、その他の文化圏、例えば中国や韓国等についても調査を広げていきたい。

前述したように本稿の目的はあくまでも調査報告である。近い将来この結果を基に再調査を行ない、日本人の本音・建前コミュニケーションの特徴について考察すると共に、それが他の文化圏で育った人々とのコミュニケーションにどのような影響を与えているのかを研究していく所存である。

尚、今回の調査やデータ処理過程で文化人類学的調査の困難さを実感した。第一に、同じ日本人でも住んでいる地域によって文化が異なるように、

例えばアメリカ人と一口に言ってもヒスパニック系、アフリカ系、ユダヤ系等と、育った環境や宗教によって考え方に差があるであろうこと、従って「これが日本人の、アメリカ人の、或いはマレーシア人の特徴である」とは簡単に言い切れない点である。それでもなお全体像を捕えようとするのであるから、かなりの数のサンプルを集め、又、地域、民族、年齢などの細かい要素を均一にするなど、データの質と量を高めなければならない。

第二は、質問者の意図と回答者の判断が完全に一致するような質問文を作成することの難しさである。今回の調査では質問が漠然としすぎていて判断に困ること、更にそれぞれの場合に於いての理由と具体例も記入してもらおうようにしたために、回答するのに時間がかかることも指摘された。又、外国人に対しては英語による調査用紙のみ作成したので英語を母語としない人々には不親切であったろう。寄せられた「理由」や「具体例」の分析は終わっていないが、次の調査ではこれらを基に具体的な場面を設定する事も取り入れたい。

このように考えてくると、アンケート用紙作成そのものについての研究を含めた、より科学的な異文化理解調査の為の方法論が新しい課題として浮上してきそうである。

謝 辞

今回の調査は国内外の多くの人々の協力に支えられた。特に、ALT への調査依頼・回収を快く引き受けってくれた Ms. Rae Parkins, 米国での調査に協力してくれた Ms. Sandra Betts と Prof. Donald Lathrop, 英国の Ms. MG Bowning, スウェーデンの Mr. & Mrs. Rubio, マレーシアの Mr. Eddi Hu と Mr. Rafie Hisakhibun に感謝する。彼らの協力なしにはこれほど多くの外国人からデータを得ることは不可能であったろう。更に、日本国内での調査の拠点となって協力してくれた多くの友人・知人、家族に、そして総計886名に上る国内外のアンケート回答者に心より感謝の気持ちを伝えたい。そして最後に、資料のグラフ作成を手伝ってくれた長崎総合科学大学船舶工学科4

年生北園健一さんにお礼を述べると共に実社会での活躍に声援を送るものである。

引用文献

- 1 前川智子「異文化コミュニケーション教育はなぜ必要か」, *The Kyushu Review* 創刊号, 九大「九州レビューの会」(1996) pp. 17-32
- 2 前川智子:「異文化コミュニケーションの壁—日本人の排他性」, *The Kyushu Review* 第4号, 九大「九州レビューの会」(1999) pp. 59-72
- 3 アーウィン, ハリー/柳井道夫監訳:『異文化理解のコミュニケーション:アジアとの対話』ブレーン出版(1998) pp. 136-137
- 4 古田暁監修:『異文化コミュニケーション・キーワード』有斐閣(1990) pp. 134-135
- 5 重久剛編著:『比較文化論』建白社(1985)
- 6 竹内靖雄:『日本人の行動文法』東洋経済新報社(1995) pp. 187-190

付録 1 ; アンケート調査質問 (日本語版)

質問; あなたは次のような場合に意見や気持ちを表すとき, 本当の考え・気持ちと異なることを述べる(表す) ことがありますか。

(1) 相手が親しい友人などの場合

よくある / 時々ある / ほとんどない / 全くない

理由:

具体例:

(2) 相手が上司等の場合

よくある / 時々ある / ほとんどない / 全くない

理由:

具体例:

(3) グループ討議の場合

よくある / 時々ある / ほとんどない / 全くない

理由:

具体例:

付録 2 ; アンケート調査質問 (英語版)

Q; Do you express feelings and / or opinions different from your real ones in the following situations?

(1) To your close friends: Often / Sometimes / Seldom / Never

Reasons:

Examples:

(2) To your bosses: Often / Sometimes / Seldom / Never

Reasons:

Examples:

(3) In group discussions: Often / Sometimes / Seldom / Never

Reasons:

Examples: